



志村真

「ガンディー on キリスト教」(マタイによる福音書 5:39、44)

1. 前期にも触れたのですが、今年2018年が「記念の年」にあたる人たちがおります。生誕100年記念とか、没後50年記念とか、そういった「記念の年」です。私がテーマとしております「聖書と非暴力」とのつながり而言えば、今年にはマーティン・ルーサー・キング Jr.の暗殺(1968年4月4日)、そしてトマス・マートンの死(同年12月10日)から50年です。キング牧師は、皆さんご存知の通り、アメリカの人種差別に非暴力で抵抗する公民権運動を主導し、またベトナム戦争に反対し、貧困の撲滅のために活動しました。そして、イエスの「あなたの敵を愛せよ」との教えについて度々説き、その教えを実践しました。マートン神父は「アメリカの良心」と呼ばれた人で、修道院の奥深くで暮らしながらも手紙と著作を通して世界中の人々と交流し、非戦と非暴力を訴えました。彼は、イエスの教え「柔和な者は幸いである」をキリスト教的非暴力の基盤として理解しました。

2. 今朝、取り上げたいのはガンディーです。「インド独立の父」と呼ばれるモーハンダース・ガンディーは、若き日に奨学金を得てイギリスに留学し、弁護士資格を取得すると、当時イギリスの植民地であった南アフリカへ赴き、かの地のインド系の人々の権利のために、非暴力による抵抗を組織して取り組みました。やがて、祖国インドに戻り、植民者イギリスの強圧的な支配に対する非暴力抵抗をインド全土で展開するようになりました。幾たびもの挫折を経ながらも、不屈なたたかいを率い、独立を勝ち取りました。しかしながら、1948年1月30日、彼のイスラームとの対話的姿勢に反発していたヒンドゥー教至上主義者による凶弾に倒れました。今年にはガンディー暗殺70年、また来年は生誕150年の記念の年となります。ちなみに、彼の誕生日10月2日はインドの祝日となっており、また2007年の国際連合総会で「国際非暴力デー」として定められました。

3. さて、ガンディーは宗教について、そしてキリスト教についてどのような考えを持っていたのでしょうか。ガンディーは、ヒンドゥー教徒として生き、ヒンドゥー教徒として死に、そのからだはヤムナ河畔で火葬され、ガンジス川などに散骨されました。けれども、彼は他宗教について深く学び、とりわけ仏教、キリスト教、イスラーム教との対話を重んじました。彼はこう言っています。

「私はヒンドゥー教徒として本能的に、すべての宗教が多かれ少なかれ真実であると思う。すべての宗教は同じ神から発している。しかし、どの宗教も不完全である。なぜなら、それらは不完全な人間によって我々に伝えられてきたものだからである。」(1924年。ガンディー『私にとっての宗教』竹内啓二他訳、新評論、1991年、45ページ。)いわゆる「宗教的多元主義」ということでしょうか。

キリスト教との関係についてはどうかと言いますと、彼は留学先のイギリスでキリスト教徒たちと

対話する機会を得、知り合いの勧めで聖書を読み始めました。『自伝』（1925年）に記された次のくだりはよく知られています。「私は『創世記』を読んだ。そして、それに続く章になると、必ず眠くなった。しかし、聖書を読んでしまったと言いたいばかりに、大変な苦勞をしながら、ほとんど興味も抱かず、また意味もわからずに、他の部分もこつこつ読んだ。『民数記』を読むのは嫌だった。しかし、新約には違った印象を受けた。特に『山上の垂訓』は私の心に直接響いた。私はそれを『ギター』（『バガヴァッド・ギター』ヒンドゥー教の聖典の一つ）と比較した。『しかし、わたしはあなたがたに言う。悪人に手向かうな。もし、だれかがあなたの右の頬を打つなら、ほかの頬をも向けてやりなさい。あなたを訴えて下着を取ろうとする者には、上着をも与えなさい』という節は、私を非常に喜ばせた。・・・聖書を読んだことによって、他の宗教の師の生涯を勉強したいという欲求が強まった。・・・もっと多くの宗教書を読み、主な宗教のすべてに通じておかなければならないということは心に銘記した。」（『私にとっての宗教』32～33ページ。『ガンジー自伝』蠟山芳郎訳、中公文庫、1983年も同様。）

結論を言いますと、彼はインドの支配者であったイギリスのキリスト教は拒否しつつ、イエスの愛と非暴力の行動と教えには虚心で向き合いました。

4. ガンディーは、イエスの「悪に（暴力で）手向かうな」「敵を愛せよ」を含む「山上の説教」に着想を得て、その非暴力思想／非暴力直接行動を発展させました。彼が「敵を愛せよ」に触れている発言を引用します。「自分を愛する人のみを愛するのであれば、それは非暴力ではない。自分を憎む人々を愛する時に初めて非暴力となる。」（『今こそ読みたいガンディーの言葉』古賀勝郎訳、朝日新聞出版、2011年、119ページ）「アヒンサー（非暴力）は、積極的なかたちでは、最大の愛・最大の博愛を意味する。私がアヒンサーの信徒であるとすれば、敵を愛さねばならぬ。」（同129ページ）

ガンディーは毎朝、早朝に起きて瞑想を実践していました。その際、イエスの「山上の説教」を繰り返し学んだそうです。キリスト教徒の間で彼ほど「山上の説教」を学んだ人はいない、と言う人がいるくらいです。彼にとって、イエスや釈尊は「教師」でした。「仏陀もキリストもたとえ人を非難したとしても、そうした行動の背後には明白な優しさや愛を示しておられた。彼らは敵に対して指一本上げようとしなかったし、真理を明け渡すくらいなら自らを喜んで差し出そうとされた。・・・私が非暴力的抵抗を起しているとするれば、それは偉大なる教師たちの足跡をただ慎ましく辿っているに過ぎない。」（1920年。Robert Ellsberg ed., *Gandhi on Christianity*, Orbis Books, 1997. P.28.）

5. ガンディーが設立した生活と祈りの共同体（アーシュラム）では、祈りや瞑想の時間にヒンドゥー教の聖典のみならず、他宗教の教典も読まれました。「私たちはアーシュラムにおいて、『バガヴァッド・ギター』を定期的に読んでいる。・・・毎朝『ギター』を読んだ後、インドの様々な聖者たちの賛歌を唱える。さらに、それに付け加えて、我々はキリスト教の賛美歌集の中にある賛歌も唱える。・・・『新約聖書』や『コーラン』からも、私は慰めを得てきた。そのような聖典に対して、私は批判的な気持ちで接することはない。それらは、私にとって『バガヴァッド・ギター』と同じくらい重要な書物である。」（1936年。『私にとっての宗教』51ページ）（これは「相互テキスト参照」と呼ばれる姿勢で、インドやスリランカの他宗教との対話を重んじるキリスト教グループにおいてもなされることです。礼拝の中で聖書と同時に仏典やヒンドゥー教の宗教詩が朗読／朗唱されたり、賛美歌のところで他宗教のチャント（詠歌）が歌われたりします。）

私がガンディーを通して学ぶことは、他宗教とそれを信じる人々に最大限の敬意を忘れないということです。その上で、自分が奉じている宗教を深めていくのです。ガンディーが接したキリスト教には傲慢なところがありました。植民地支配を正当化もしていました。そのことははっきりと批判しつ

つも、イエスには聞こうとしたのです。

また、彼が他者と粘り強く対話していることに驚きを覚えます。ガンディーのところには、メディアを含め、様々な人々がやってきました。キリスト教徒もしばしば訪れました。その中には、ガンディーをやり込めたり、改宗させようとした人もおりました。けれども、彼はたとえ相手がそのような人であっても、相手の主張をしっかり聞き、そしてていねいに答え、反論・批判するときも穏やかに、けれどもしっかりとそうしたのです。彼のインタビューの映像を見たことがありますが、とても穏やかでていねいな口調でした。相手に反論するときも、まったく同じ穏やかなトーンに貫かれていました。深く学びたい姿勢です。

掲載元：[中部学院大学・中部学院大学短期大学部](#) [チャペルアワー](#)